



TITLE:

中国におけるキリスト教本色化運動：西洋宣教師の動向についての考察

AUTHOR(S):

徐, 亦猛

CITATION:

徐, 亦猛. 中国におけるキリスト教本色化運動：西洋宣教師の動向についての考察. アジア・キリスト教・多元性 2009, 7: 89-100

ISSUE DATE:

2009-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/74756>

RIGHT:

中国におけるキリスト教本色化運動 ——西洋宣教師の動向についての考察——

徐 亦 猛

一、序

近年、中国教会の本色化問題は、20世紀前半の中国キリスト教史についての重要な研究課題として、注目を浴びてきている。研究者たちは、中国教会が自立や本色化を求めることはその時期の中国教会発展の大きな成果として積極的に評価している。1922年頃から強まって来た反キリスト教運動に対抗して、中国のキリスト教会において本色化運動が起こった。その際、本色化運動の指導者たちは、福音と文化、中国伝統文化とキリスト教信仰を深く関連づけることによって、キリスト教を本色化しようと試みたのである。さらに中国教会を西洋教会から独立させ、全民族の利益に服従させることが中国キリスト者の利益であり、中国キリスト教会にとって唯一の進む道であることを認識した。中国の教会指導者自身が教会の自立と本色化を求めたのであったが、西洋のミッションと宣教師が中国教会の自立と本色化の実現に協力したことは否定できない。西洋宣教師については、すでに山本澄子が、その著作『中国キリスト教史研究』（1972年）において扱っているが、山本は非常に簡単な紹介だけで、十分に時代的背景における西洋宣教師の動向や本色化運動との関わりなどについて論じてはいない。中国におけるキリスト教の本色化問題を考察する際、単に中国教会の指導者の立場を検討するだけでなく、宣教師側の動向も注目すべきであり、そのことにより、本色化問題の全体像を捉えることができる。

19世紀後半から、中国における西洋ミッションの宣教戦略に根本的変化が現われた。すなわち、現地の中国人を助手として雇って宣教師の指導監督のもとで宣教活動を行うという、宣教師を中心とした従来の宣教モデルから、自立と本色化の理念のもとに新しい宣教モデルへと転化したのである。一部の思想的進歩の宣教師たちは新しい宣教モデルのもとに、中国教会における自治・自養・自伝を実現させるために協力し、中国社会と文化に適應できる本色教会を設立できるように主張した。20世紀における中国民族主義運動の高揚を背景として、宣教師たちは中国人教会指導者と共に、中国教会の連合・合同を促し、教会の管理運営も中国人に手渡すことにより、新しい宣教理論を实践したと言える。本論文では、以上のように自立と本色化の協力を推進し、中国における宣教師の動向について考察する。

本論文では、まず本色化思想の生成及び発展について、教会内外の歴史的背景に考察する。すなわち、世界的なキリスト教宣教大会の動向に注目し、「三自」理論の提起、発展について論じる。続いて、キリスト教海外宣教理論の発展の下に、中国で活躍した宣教師たち自身もその宣教理論を一つの挑戦として、中国で三自の教会を建設してきた努力を評価しつつ、世界的視野のもとに、中国国内の宣教師たちの動向について考察する。そして、宣教師たちの宣教理論と思想はただ討論として留まるのではなく、具体的な宣教活動において実践されたことについて言及する。最後に、議論の全体的なまとめを行う。

二、世界的動向

まず、本色化思想の生成及び発展について、教会内外の歴史的背景に注目してみよう。近代キリスト教海外宣教運動は広範な地域に関わる世界的運動である。アジアやアフリカなど西洋のキリスト教世界以外の地域は西洋教会の福音開拓の場となった。宣教師たちが中国で遭遇した問題や困難は、他の地域においても発生した。宣教運動の規模の拡大と共に、西洋ミッションの経済的負担もかなり大きくなった。このことは本色教会が経済面において西洋ミッションに頼らないで教会の自養を実現する直接原因であった。本色化教会の自治(self-governing)・自養(self-supporting)・自伝(self-extension)という考えを最初に提起したのは、アフリカにおける英国聖公会の宣教師ヘンリ・ヴェン(Henry Venn)であった。1841年、ミッションが大きな経済問題に直面したとき、ヴェンは宣教地の教会における現地人の牧師の採用や現地教会の自養の実現などの問題を提起した¹。それ以後、彼はこの主張を展開し、自養、自治、自伝という「三自」の宣教理論を構築した。1860年リバプール宣教大会において、多くの参加者はヴェンの「三自」の宣教理論を賛同したことから、これが単なる個人的な独自の考えではなく、当時影響ある代表的な考えであったことが推測できる²。ヴェンと同時代の米国公理会(ABCFM)³宣教機構責任者ルーファス・アンダーソン(Rufus Anderson)も類似する観点を発表した。1841年ABCFMの年度報告において、彼は宣教活動を通して、現地の教会指導者の育成に注目しなければならないと提案した。「(現地人の叙任式に関して)このようにして、福音はまもなく現地で土着化し、福音施設は神の恩寵を通じて自立と自伝のエネルギーを獲得した」と書いた⁴。1848年の年次報告でも、ABCFM幹事の署名入りで同じ関心が示されている。「現地の伝道教会に関しては、以下の問いが出てくるであろう。こうした教会はどこまでこの国のすべての団体の権限から独立すべきであるか、自養と自立に向けてどのように訓練されるべきか。……宣教師が教えるべきことと伝道教会の性格に関して、ABCFMの責任は何か」⁵。

ヘンリ・ヴェンとルーファス・アンダーソンが提起した「三自」の宣教理論は19世紀後半のプロテスタント宣教運動の主流思想となっただけではなく、世界各宣教地においても実践された。そして、1900年、ニューヨークで開かれた宣教大会において、本色化教会の自養の問題はさらに注目された。この大会中、世界各地からの宣教師たちは「本色教会の自養」を主題として取り上げ積極的に討論を行った。米国メソジスト教会のジョージ・ウィントン(George B. Winton)は宣教についての原則をまとめた。「宣教資金は宣教師自身の伝道活動に限って使う、現地の信徒に教会の経済を負担するように最初から教える、現地教会の自養を実現させる」⁶と。この大会の大きな成果として、全世界の宣教団体は現地の教会の自養の実現を宣教の基本原則として認識し、それを実行することで一致した。

1910年6月にエジンバラで世界宣教会議が開催された。この会議の第1部門において、宣教師たちは「宣教地における教会」という主題のもとに、熱心に討論した。現地のキリスト教化はその国のキリスト者によってなされることが最も効果的なのである⁷。したがって、討議資料が明白に述べているように、宣教活動の重要課題とは、「どこにおいても、人間の心に対してキリストが彼らの救い主だと説くこと」と同時に、現地教会に教会を建て、指導者を育て、その教会が「三自」を達成できるよう導くことなのである⁸。ここには、G. ヴァルネックに代表される「教会の植え込み」(plantatio ecclesiae)という宣教理解が強

く反映されているといえるだろう⁹。1910年のエディンバラ世界宣教会議は、後にエキュメニカル運動で活躍する人々すべてに靈感を与え、国際的で超教派的な宣教協力の関係を維持する継続委員会を設立した。「エディンバラ継続委員会」の主な活動は、エディンバラ会議の精神を維持して、欧米諸国の宣教協会の連合組織の設立や、宣教師たちと現地の教会の協力機関であるキリスト教連盟の設立を促すことであった¹⁰。エディンバラ会議において、欧米教会における現地の宣教は、従来対立あるいは孤立して活動していた各教派による単独宣教時代から、教派、国籍、人種を超えて協力関係を築く時代へと入ったのである。

1912年から1913年にかけて、継続委員会の議長J.R.モットが中国、日本、インドなどアジア各地を訪問し、宣教師と、現地のキリスト教者の両者の参与による宣教会議を相次いで開催している。その会議をきっかけとして、各国キリスト教協議会（National Christian Council: NCC）が設立された。これらの各国キリスト教協議会は、各国内で合同教会の設立を促したばかりでなく、他国のNCCや宣教会議との間の、媒体的な組織となったのである。

三、中国国内の動向

場面が海外から中国国内に移るのに伴って、時代がもう一度19世紀初頭まで遡り、その後にも議論の区切りにおいて、時代を遡った考察が行われる。1807年に最初のプロテスタント宣教師英国ロンドン会のR.モリソンが中国の広州において宣教を始めて以来、中国におけるキリスト教宣教は長くかつ困難な時期に直面した。特に、アヘン戦争以降、中国にいる宣教師は事実上本国の政治保護を受けることになった。一部の宣教師たちは、西洋列強と中国の間で結ばれた不平等条約を利用して最大限自己の利益を守ることを願った。さらに19世紀はちょうど西洋文化が他の文明に対して圧倒的な優位を確立した時期であり、宣教師たちの中には、自国の文化に対して自負し、また中国の文化を時代遅れの愚昧で頑固なものと考えた者もあった。彼らはいわば救世主の立場に立って、こうした自分の主観的な信仰理念を中国人に強引に押し付けた。そのため、宣教側と宣教される側の対立がますます深くなった。中国人は全力でキリスト教の伝来を阻止した。反キリスト教、反宣教師の意識が高まった。19世紀の後半、中国各地に反キリスト教的風潮が盛んになり、また20世紀初めに中国人の民族意識が変化したことによって、キリスト教の中国における宣教戦略が促進された。そして長年中国で活躍した友好的見識のある宣教師たち自身も中国で三自の教会を建設しなければならないと認識し、その宣教理論を一つの挑戦として全面的に支持した。こうした宣教師たちは中国に滞在時間が比較的長く、中国文化と伝統にある程度の理解していた。彼らは中国民衆による反侵略の民族主義に同情し、中国人信徒の見識、覚悟、勇気と独立精神とを尊重することによってこそ、キリスト教は中国において発展できると認識した。彼らもキリスト教運動の指導の中心を西洋ミッションから中国の教会へ移行すべきだと考えた¹¹。

19世紀末、各教派の西洋ミッションは伝統的宣教モデルのもとで、中国のキリスト者の人数も徐々に増えつつあった。これを数量的に見ると以下の表の如くである¹²。

西 暦	信 徒
1814	1
1833	3
1853	351
1863	1, 974
1865	3, 132
1873	9, 715
1876	13, 035
1889	37, 287
1900	112, 808

それは伝統的宣教モデルの成果と言える。西洋各教派の教会は中国へ宣教師を派遣し、そして各教派は本国で集めた宣教資金によって中国にミッション・スクールを設立し、医療伝道などの事業を通して、中国人へキリスト教的影響を及ぼし、信徒の数を増やすことを目指した。このモデルによる宣教過程において、宣教師たちは中国人信徒を助手として雇い、宣教活動を促進した。しかし、宣教師はすべて宣教活動の中心であり、現地の信徒はいつまでも補助の地位に置かれた。これに対して、中国のキリスト教界からこのような宣教モデルに対して本当の宣教運動の主旨に適しないという疑問が投げかけられた。多くの者は中国におけるキリスト教宣教は宣教師を中心とする時代から中国人自身が活動とする時代へ、中国の教会は宣教師を頼るよりも自治・自養・自伝へ替えるべきとし、そうすることによってはじめて、キリスト教は中国社会へ根を下ろし、中国文化の背景の中に認められる宗教になると考えた。東洋固有の文明を発揚し、一刻も早くキリスト教から「洋教」という悪名を取り除くために中国教会を自立させること、これが、20 世紀になって、宣教師と中国人教会指導者の共同目標となった。その新しい宣教モデルのもとで、中国のキリスト者の人数と中国人伝道者、牧師の人数が増え、外国宣教師数の四倍以上であって、下図の如くである¹³。

西 暦	信 徒	中国人伝道者	中国人牧師	外国宣教師
1906 年	178, 251	9, 761	345	3, 833
1912 年	235, 303	17, 879	650	5, 186
1915 年	268, 652	20, 460	764	5, 338
1917 年	312, 970	23, 345	846	5, 900
1918 年	345, 853	24, 732	1, 065	6, 636
1920 年	366, 524	28, 396	1, 305	6, 204

以上の分析のように、1922 年の中国キリスト教大会以来、中国人伝道者と牧師の人数が増え、彼らの指導のもと、キリスト教における本色化運動は教会発展の主な流れになった

のである。

19 世紀後半、一部の宣教師にとって伝道は唯一の働きであり、すべてミッションを中心として伝道活動を展開していた。その結果、宣教師たちは、中国の教会の自立や本色化に対して、全く関心を示さなかった。彼らは本国からもっと多くの宣教師たちが中国へ派遣され、多くの宣教経費を受けて、中国人信徒を助手として雇うことを期待していた。しかし、結果的に、多くの中国教会は外国のミッションと宣教師に頼りすぎになり、また一部の信仰動機不純の人（Rice Christian）がキリスト教に入るようになった。そういう人たちは、お金を目当てに、宣教もせず、宣教師の勢力を借りて自分の同胞をいじめ、中国民衆に非常に悪い影響を及ぼした。同時に、宣教師たちは中国人信徒の自立精神を育てなかったため、中国人信徒は教会に対する責任感も義務感も感じなくなった。そのような背景の下に、1877 年 5 月上海においてプロテスタント宣教師全国大会が開かれた。会議中、特に注目されたのは現地教会の「自養」の問題であった¹⁴。中国にいる宣教師たちは 1860 年のリバプール宣教会議の「三自理論」を踏まえて、教会「自養」の問題について、熱心に討論した。アメリカメソジスト教会の宣教師は「本色化教会の自養」について講演した。彼は講演の最初において「本色化教会を一刻も早く実現しなければならない。私たち宣教師の責任として、自分の権限の範囲内でそれを実現させ、良い結果に達するように努力すべきである。このことについて宣教師はだれも反対するべきではない。教会の自養を実現することこそ、本当の本色化教会と言える。外国の資金に頼るばかりの教会は現地の人々から猜疑の目で見られる」と述べた¹⁵。さらに、彼は現地の教会へ資金援助する従来のミッションの宣教モデルを厳しく批判した。「従来の宣教モデルの下においてキリスト教はねじ曲げられ、その発達は遅れてしまう。このようなモデルによって訓練を受けた中国のキリスト者は、最初から西洋の教会の資金の豊富さについて、西洋教会が中国の教会を助けるために喜んで献金を捧げるという誤った理解をしている。宣教師は宣教資金を使って宣教助手を雇うことを慎重にしなければならない。適当な現地の人を雇い、彼らの同胞に伝道する。一旦キリスト教へ入信し教会の会員になった時から、彼らに対して自分の能力に応じて福音宣教をサポートする習慣を育てるべきである」と¹⁶述べた。

1900 年の義和団の乱以後、各宣教団体は以前の宣教策略を反省し、中国民衆との関係を改善することによって、宣教効果を上げることを願った。その際、宣教師たちは中国におけるミッション系大学で中国人教会指導者を育てるために力を入れた。1905 年に科举制度が廃止されたことによって、多くの中国の優秀な青年がミッション系大学に入って勉強するようになった。そしてのちに中国キリスト教会へ多くの有能な本色化運動の指導者が送られた。このような背景のもとに、モリソンの渡来を記念した宣教百年記念会議として、第三回キリスト教全国大会が 1907 年に上海で開かれた。会議においては、1877 年と 1890 年のキリスト教会議の討論と実践を踏まえて、現地教会の自養、自治、自伝が大きな議題として取り上げられた。英国宣教師ギブソン（Gibson）は自分の広東省での伝道経験を紹介しながら、中国教会について報告した。彼は、「中国の教会は外国の教会のコントロールから離れ独立すべきである。今その独立の時期が来た。中国人のキリスト者において優れた指導者が多くあり、彼らはキリスト教をよく理解し、自身の同胞にキリスト教を伝えている。われわれ宣教師が宣教活動を展開する際に、彼らの力を借りるのは妥当である。中国の教会は中国キリスト者自身によって管理され、指導されるべきである。わたしたち宣

教師は教会を中国人に渡すことを惜しまず、積極的にこの過程を提唱し参与すべきである」と論じた¹⁷。教会の自治を実現するために、自養は最も重要な前提である。すなわち経済上の自立である。この経済上の自立を実現するため、ギブソンは、「まず中国人信徒に積極的に献金することを勧める。中国人信徒自身の献金によって、自治教会の運営と発展を支える。外国の資金は宣教師たちのために使うべきであり、中国教会の運営は中国人信徒の献金に頼る」と提案した¹⁸。自治と自養は目標を達するための手段であり、教会の主な努力目標は自伝である。

しかし、1919年の5・4新文化運動と1922年の反キリスト教運動以後、民族主義の高揚によって、中国教会内部の情勢は急速変化した。多くの中国人キリスト者は民族意識を高め、積極的に愛国運動へ参加し、その結果、西洋教会のコントロールから自立することを求めるようになった。すなわち、宣教師主宰の教会は中国で活動しにくいことから、教会の主導権を一刻も早く中国人側へ移すことや、中国人指導者がこの社会情勢のもとで教会発展の責任を負うことなどが目指されたのである。西洋各教派が中国において独自に宣教する在り方は永遠に続くものではなく、外国の勢力による中国教会への支配は中国の宣教の主な障害であり、中国教会が成長しない原因でもある。誠静怡は、「民族正義の問題において、教会は避けられない責任を持っている」¹⁹と述べた。その際、教会の自立は「本色化教会」に言い換えられた。本色化教会について、中国教会の指導者誠静怡は、「教会の一切のことを、中国信徒の負担責任とすること以外に、最も重要で解決しなければならないのは、東洋におけるキリスト教をいかに東洋人の『需要』に適合させるか、キリスト教の諸活動を、いかに東洋の習俗、環境、歴史、思想と融合させ、数千年間に結晶した文化の中へ、人の心にまで深く入り込ませるかという問題である」²⁰と説明した。誠はキリスト教を東洋文化歴史環境と融合させることによって、東洋の歴史文化はキリスト教とお互いに受け入れる内在の価値を持つことになると主張した。宣教師たちもこれについてかなりの討論を行った。ある宣教師は、「私たちが認めなければならないのは、どの民族であっても理論と実践においてキリスト教を解釈する機会がある。どの民族でも最も偉大な真理を正しく理解できる。そして世の人々に対して多大な貢献ができる。東洋の国家において教会を建てる良い方法は、キリスト教の基本原則を東洋の各民族にとって受け入れやすい形で宣べ伝えることである。霊性を刺激することによって、東洋民族の中に特殊な組織方式と連合発展の特殊な様式が形成される。このようにして、各国のキリスト教会ははじめて本当の本色化教会になる」²¹と論じた。相当数の開明的な思想を持った宣教師が、キリスト教の本色化の流れに対して理解と同情の感情を表した。ある宣教師は、「中国の教会は本当の中国人教会になることによって、中国人の思想概念の中にあるキリスト教の洋教という色彩や宣教の障害を取り除くことができる」²²と認識し、宣教師エドヴィン・マルクス (Edwin Marx) は本色化について、「キリスト教が中国人の生活と思想によって同化されることによって、キリスト教は中国精神を持つと同時に、中国様式によって表された宗教となる。その意味で、中国人はキリスト教を自分自身の経験を通して新たに解釈できる」²³と説明した。

1926年1月世界宣教協議会 (International Missionary Council) 会長J.Rモット (Dr. John R. Mott) は中国に訪れ、中華基督教協進会に属する60名の宣教師や中国人指導者と一緒に中国の教会の発展について会談し、その際に、「キリスト教事業のすべての管理権、

速やかに中国側へ移行しなければならない。ミッションはキリスト教組織の中の意義ある部分であるが、時代的流れに適応するため、過去には重大な宣教責任を担ったミッションの使命はしだいに終わらせる必要がある。外国人の組織としてのミッションは中国のキリスト教宣教事業から完全に離れなければならない。その具体的な時期については、各地方の中国教会の具体的な成長状況によって確定される」²⁴と強調した。モットの宣教事業に対する大きな影響力のゆえに、宣教師たちの間に本色化運動に対する理解と支持が広がった。こうして、西洋のミッションが中国における歴史的な使命を終わり、教会を中国側へ移行し、中国人の指導のもとに教会がさらなる発展をすることが目指されることになった。本色化運動がミッションや中国教会へ強大な影響を与えることによって、ミッションや宣教師は宣教観念と策略の変更に迫られ、中国教会への支持を強めた。

四、中国における宣教師たちの実践

宣教師たちの宣教師理論と思想は討論にのみ留まるのではなく、具体的な宣教活動において実践された。それによって、20世紀前半において、中国教会は大きく発展した。

宣教師たちが論じた教会自立の問題の中で、最も重要な部分は中国教会各教派の連合である。本色化教会は自身の弱い立場を克服するために、西洋ミッションから中国へ伝えてきた教派的な相違を破棄し、教派間の連合・合同と協力を目指す。そして医療・宗教教育などのキリスト教宣教事業を通して、中国における各教派間は外国教派の壁を取り壊し、教会の「洋教」という色彩を取り除くのである。

中華民国を成立以後、中国教会の連合・合同は下準備と実施の段階に入った。米国長老教会の宣教師Edwin C. Lobenstineはこのことについて、「教会連合・合同運動の展開について、その一つの原因は、教会自身の発展である。もう一つの原因は、各教派の教義の内容が共通する点があることを宣教師たちが自覚することである。その意味で、各教派間は互いに対立し、独自宣教するのではなく、連合・合同し、協力し合うべきである。そうすれば、大きな宣教結果が出る」²⁵と述べた。

宣教師たちの自立理論の具体的な実践としては、中国教会の連合・合同の促進が挙げられる。中国における各教派の連合・合同は、本色教会の建設にとって、当面の急務であった。宣教師たちと中国人教会の指導者は各教派の合同団結によって、緊迫した社会情勢に対応できると考えたのである。教派の連合・合同について、教会内部において繰り返して熱心に討論した後、実行可能な四つの方式がまとめられた。まず同じ教派のもとにある各教会を統一することである。例えば、バプテスト系の各教会を「中華浸礼会」、ルーテル系の各教会を「中華信義会」と統一する。このような合同・連合は内部的な整合であり、教義、組織、人員の配置、経済の調達など最小限度の調整によって可能になる。教会内部の人々は比較的このような調整を受け入れやすいし、これは最も障害の少ない近道であり、将来の広い範囲における各教派連合・合同の最初の一步として認識された。第二は、同じ地域の各教会の連合・合同によって教派を超える大きな連合体を設立することである。これらの地域の教会指導者は、教派を越え、相互に協力し合うことについては、現地の重大な社会問題を解決できることや、社会福祉事業の展開や臨時の突発的な事件に対応する上で大きな助けになることなどの価値を認めた。例えば、廣東基督教会は長老派や公理会など八つの教会が連合した教会組織である。第三に、教会の一部の指導者は、教会の統一を

強制的に求めずに、一定程度の超教派の連合体を設立し、公の問題における行動一致を図った。例えば、中華基督教協進会及び各省の基督教協進会の存在である。このような形式的な連合・合同によって、諸教会はあらゆる重大問題を解決するために比較的まとまった組織として対応でき、未来において各教会が連合するための現実的に実行可能な土台を提供した。第四に、教会の一部の組織（例えば中華基督教教育会、衛生会、日曜学校会など）は、教育、医療などの社会公共事業を通してよりよくキリスト教社会事業を展開し、それによって場所や地域を越えて協力することを強調した。このような協力によって、様々な社会問題に直面しても、スムーズに問題を解決できるようになり、教会における社会事業の発展や社会的な影響を拡大することも可能になる²⁶。

以上の方式に基づいた、この時期のキリスト教各教派の連合の模範的な事例として挙げられるのは、廣東基督教会である。1924年11月24日、廣東地区の教会連合を促進する組織である「跨差会委員会」(Inter-missions Committee) は国内事務委員会 (Board of Home Missions) を設立し、各ミッションからの伝道とミッション・スクールへの献金を統括的に管理し、西洋の宣教師と中国人教会指導者が同じ組織のもとに協力し合い、伝道活動を行うことを提案した。その提案を受け、1925年末に長老会、公理会など8つの教派が連合して、中華基督教会廣東支部の設立を計画した²⁷。それまで各ミッションが管理していた宣教師の活動資金は全部連合の中国教会の管理のもとに置かれ、宣教師の働き場所はすべて廣東支部が直接決める。廣東地区にいるすべての宣教師は中国教会のメンバーとなり、新しく派遣された宣教師については、廣東支部が直接に国内事務委員会と協議したうえで任命する。伝道活動を展開するために西洋ミッションに属する財産はすべて中国教会へ引き渡し、廣東支部がすべて海外の教会からの献金を管理し、直接海外の教会へ連絡を取り、定期的に教会の年度活動報告及び財務報告を海外の教会へ提供する。同時に、伝道、教育、医療の分野について、独自の理事会を設立し、すべての高等教育、医療活動を管理する。以上の計画における細かい部分の制定について、各教派の教会による改訂と承認が必要であるが、この計画は全体的な原則として各教会とミッションに受け入れられた。こうして各教派のミッションは独立性を失い、すべて中国教会に吸収されることになった²⁸。1926年6月に開かれた第八回の年会において、大多数のミッションが教会の管理運営を中国人に手渡すことに同意した²⁹。

全国的な組織の実践的な動向から見て、最も代表的な実践は中華基督教会の成立である。中華基督教会は20世紀前半において、中国国内の最大の超教派の連合・合同教会である。中華基督教会の成立の流れは以下の通りである。義和団の乱以後、長老教会は八つの教派を合同して「中華基督教長老会」を設立した。中華基督教長老会は単に諸教会の合同を目的としただけでなく、ミッションから独立した「中国教会」をつくることも意図されていた、と考えられる³⁰。1901年から数回の会議を経て教会の連合・合同について討論した。1918年4月17日に南京で開かれた中国基督教長老会の総会にロンドン会と公理会とが参加し、「中華基督教合同教会」をつくる計画が立てられ、1922年4月上海でこの三つ教派の代表を中心として「中華基督教会臨時総会」を設立した。そしてついに、1927年10月、上海で最初の総会が開かれて、全国組織の「中華基督教会」が正式に発足した。全国総会に参加した88名の代表のうち66名が中国人の指導者で、彼らは12の教区と51の分区とを代表していた。中国全土で14の教派が中華基督教会に加盟し、数百の教会堂が含まれ、

会員数は12万を超え、全国キリスト教人口の約三分の一を占めた。参加したあらゆるメンバーが明確に旧教派の思想を放棄し、「教派を超え、一つにする」という原則に基づいて、本色教会運動を推進し、中国教会の総体的な合一を目指した。中華基督教会は、中国人信徒が正統な信仰に根ざして、自分から主体的に動いて結成した中国国内の最大の超教派の連合・合同教会であった。教派的伝統を奨励せず、国の境界によって分かれたらず、ただ中国の社会情勢に適合することと、中国社会の需要に対応することが求められた³¹。これは宣教師たちが促進した教派連合・合同運動の最も顕著な成果であり、中国での新たな宣教戦略の成果でもある。

結論

中国国内外の激しい情勢の変化に伴って、20世紀初期の中国におけるキリスト教宣教方針は宣教事業から本色化事業へと転換した。その際に、中国の教会を自立させ、本色化へ向けて促進させた宣教師たちの役割は高く評価すべきである。もちろん宣教師は本色化運動に対して様々な複雑な感情をもっていたが、中国におけるキリスト教の発展時間が短いこと、宣教事業の幅が広く、さらに中国教会の経済などの基礎が弱いことなどを考えれば、宣教師たちの中国の教会に対する色々な心配や疑いもやむを得ないことである。ある宣教師は、「今宣教師の考えはまるで万華鏡のようであり、全部をまとめるのは不可能である」³²と述べた。しかし、相当数の宣教師が中国教会の内部の改革を支持し、教会の組織、経済、人材の養成、宗教文化伝統などにおける速やかな革新を促進した。さらに彼らは、宣教事業を中国教会側へ移行し、中国民衆からの孤立や猜疑を避け、キリスト教をもっと中国化し、時代の流れに適応できるよう願った。確かに、いくら教会が経済面で自立しても、教会の主導権を中国側へ速やかに渡さなければ、中国民衆の間に広がった「洋教」の名前をキリスト教から取り除くことはできないのである。そして、中国国内の民族主義が日に日に高める背景においては、西洋ミッション及び宣教師の主宰する教会は中国における宣教の局面を開拓することが出来ないし、キリスト教は中国社会の中に浸透できない。その意味で、早めに中国教会に対する主導権を捨てることこそが、宣教師が自分の使命に対する自覚を示すことになるのであって、キリスト教が中国において存続して発展し続けるための時代的要請でもあった。

中国の教会の自立や本色化によって、中国における宣教戦略も少しずつ変化が生じた。教会の主役は西洋の宣教師ではなく、中国人信徒自身である。もちろん宣教に対する両方の立場や視点はやや異なり、対立部分もあるが、そういう立場や視点を結合するゆえ、はじめて教会内部の指導権移行がスムーズに推進できる。キリスト教は必ず中国の土壌において成長させるべきであるという宣教方針は現代の中国における宣教活動に対して大きな意義を示すものであろう。

注

1 C. Peter Williams. *The Ideal of the Self-Governing Church*. Leiden; New York: J. Brill,

- 1990, pp3-4.
- 2 Ibid., p24.
- 3 ABCFMは American Board of Commissioners for Foreign Missions である。
- 4 Pierce Beaver ed. To Advance the gospel, Selections from the Writings of Rufus Anderson, Grand Rapids, William B. Eerdmans Publishing Company, 1967, p103.
- 5 Ibid. p122.
- 6 Ibid., pp289-324.
- 7 WMC, Report of Commission I, Carrying the Gospel to All the Non-Christian World, p318 and p368.
- 8 Ibid., p312.
- 9 村瀬義史「宣教における教会間のパートナーシップの一考察―戦前の世界宣教会議における「若い」教会と「旧来の」教会との関係を通して―」『神学研究』、第 52 号、関西学院大学神学研究会、2005 年、230-231 頁。
- 10 J.R.Mott, At Edinburgh, Jerusalem and Madras, International Review of Missions, Vol. XXVII, 1938, p301.
- 11 Preface, in Rev. Frank Rawlinson(ed), China Christian Year Book, 1926.
- 12 山本澄子『中国キリスト教史研究』、山川出版社、2006 年、19 頁。
- 13 同上、19 頁。
- 14 同上、26-27 頁。
- 15 S.L.Baldwin, Self-support of the Native Church, Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China, Shanghai; Presbyterian Mission Press, 1877, p283-284.
- 16 Ibid., pp287-288.
- 17 Records of China Centenary Missionary Conference, Shanghai, Centenary Conference Committee, 1907, pp8 - 11.
- 18 Ibid., pp11-15.
- 19 誠静怡、「中国基督教会和全国運動」『教務雑誌』、1919 年 7 月、456 頁。
- 20 誠静怡、「本色教会之商榷」『文社月刊』、第 1 巻第 1 冊、1925 年、9-10 頁。
- 21 方约翰「教会与差会」、『中国基督教会年鉴』、第 12 期、1934 年、25 頁。
- 22 Logan H. Roots, The Changing Function of the Missionary, in Rev.Frank Rawlinson(ed), China Christianity year Book, 1926, p163.
- 23 Edwin Marx, Progress and Problems of the Christian Movement since the Revolution , China Mission Year Book, 1924, p97.
- 24 E.C. Lobenstone, The Relation of Mission and church, in Rev.Frank Rawlinson(ed), China Christianity year Book, 1926, pp178-179.

- 25 羅炳生「中國教會聯合事業之進步」『中華基督教會年鑒』、第4期、1917年、199頁。
- 26 誠、「本色教会之商榷」、6頁、霍德进「中国教會的聯合問題」『文社月刊』、2:9、1927年、17-21頁。
- 27 Eugene E. Barnett, *Cooperative Christian Activities in China in 1925*, In Rev. Frank Rowlinson(ed), *China Christian Year Book*, 1926, pp95-96.
- 28 George H. Mcneur, *Chinese Christian Autonomy*, in Rev. Frank Rowlinson(ed), *Chinese Recorder*, 1926, pp17-18.
- 29 *Annual Meeting of the Kwang Tung divisional Council of the Church of Christ in China*, in Rev. Frank Rowlinson(ed), *Chinese Recorder*, 1926, p461.
- 30 山本、前掲書、60頁。
- 31 姚民权・罗伟虹『中国基督教簡史』、宗教文化出版社、2000年、187-188頁。
- 32 Editorial, *The Kaleidoscope*, in Rev. Frank Rowlinson(ed), *Chinese Recorder*, 1926, p533.

(XU Yi Meng 関西学院大学大学院神学研究科研究員)

